何分最初相答候通り之義にて、其節も猶又大乘院始組合一同、終日祈念致候得共、一向立去樣子も不相見、今以同篇に而、全快不仕候ニ付、此節出所之義、祈念品々手當等仕り、右大乘院義、御吟味筋之義者相願不申候得共、同人狐遣候よし、外之方も私方同樣之義、所々ニ有之趣、風聞も承及候間、此後いか樣之義出來引合相成可申も難計奉存候間、此段申上置候、

御普請役　町田相之助

寅五月

右之通申聞候ニ付、申上置候、以上、

〔松亭反古囊上〕狐の術

狐のことは、往昔より口碑に傳へ物に記して、その物語種々あり、蓋人に冠せられて、その恨みを報うがごときは、獸といへどもその理あり、然るに思も恨みもあらぬ人に魅て惱ますは、悉皆何の爲なるぞ、たゞその食を貪る爲か、また彼が晒落なるか、更に解すべからざる所なり、玄中記にいはく、狐五十歲能變化、百歲爲美女、爲神巫、爲丈夫、與女子交接、千歲能知千里外事、卽與天通、爲天狐、と見え、五雜俎に、云々、狐千歲始與天通、不爲魅矣、其魅人者多取人精氣、以成內丹、然則其不魅婦人何也、曰狐陰類也、得陽乃成、故雖牡狐必托之女、以惑男子也、然不爲大害云々、思ふにこれ謝肇淛何に因てかくいふにか、凡そ狐美女に化し男子を誑かして精氣を取る、その取らるゝもの必死す、夫のみならず狐に魅れ久しくして退かざるは、究めてその人死に至る、奚爲大害をなさずとせん、むかし余が相識る人五十に及びて淫虐なり、或夜一人酒樓に至るに、これより嚮二十有餘の美人ありて獨酌をなす、彼人これを見て歡びつゝ、元來知る人にあらずといへど、盞を酌すにより、美人もまた悅びて膝を雜へ、酒嚥なし沈醉におよび其處を立出、夜のいたく更して駭て、美人のいはく、吾夫なし、他人の許に寄宿なせば、今さら歸り門を敲くは、いさゝか面伏なりと、うち萎れたる景勢なるに、かの男はよき僥倖と、夫より相識方に伴ひ、二階に登りて諸共に臥す、かく